



春には一面の花

きれいな道をみんなの手で!! 藤樹の里あどがわ花いっぱい運動

●特集 ②-⑤ 郷土の先人を誇りに 受け継がれし「良知のこころ」

- 6-8 お知らせ拡大版
- 9 こころの絆
- 10 みんなで5・7・5
- 11 市長日記・省エネ長者作戦
- 12・13 まちなタ写真館
- 14 教育委員会 information
- 15 健康生活
- 16 びょういんだより
- 17 国保年金あらかると
- 18-21 情報おしらせ版
- 22 そうだ図書館に行こう♪
- 23 窓口・納税
- 24 歴史散歩

高島市
歴史散歩

No.48

江戸時代に全国ブランドの「朽木盆」

朽木産の塗物類は、江戸時代を通じて、將軍・大名から一般庶民にまで、その存在を知られるとともに、広く愛用されてきました。

なかでも、朽木盆や菊盆とよばれる丸盆は、黒・朱・緑・茶色の地に彩漆で菊をはじめとする草花・鳥蝶・山水を描いた意匠に特徴があり、素朴さの中に雅味を漂わせていることから大変人気を博しました。

朽木塗は、江戸時代初頭から幕末まで、数多くの俳諧指南書・地誌・紀行文・小説など幅広いジャンルに登場していることから、朽木盆が全国有名ブランドの地位を獲得していた様子がわかります。その主なものを紹介します。

『俳諧当世男』

延宝3年(1675)、西原が32歳のときに江戸で詠んだと思われる「盆の 下ゆく菊や朽木盆」の句を載せる。

『柳久一世の物語』

井原西鶴の好色物で、貞享2年(1685)に刊行された。柳久とは実在の大坂堺筋の商人、柳屋久右衛門のことで、豪遊の果てに家財をなくし、貧窮孤独のうちに精神錯乱を起こして水死したという。物語上巻の中で、柳久が旅芝居の花川順之助宅を訪ね「朽木盆に盆を置き、飛魚のむしり肴

をこしらえて置いてあるが、こちらへ出さないのは、酒を買ってくるのを待っているらしくて滑稽である。」という条に見える。

『反古庵茶之湯留書』

江戸前期京都の茶人藤村庸軒(1613-99)が催した茶会の記録。庸軒、名は源兵衛、反古庵と号する。古田織部・小堀遠州に師事し、千宗巨より皆伝を得る。後に藤屋家の茶亭となった。貞享2年(1685)12月3日の茶会中の会席の項に「香の物クツキ挽物二入、貞享4年(1687)11月24日の項に「クツキ細工挽物二香物クキ細一切ふりて」の記事を載せる。

『西北紀行』

儒者、本草学者・教育家であった巨原益軒が、元禄2年(1689)正月に京都を出発して、丹波・丹後・若狭を巡った旅をつづけた紀行文。巻之下「朽木の町にて、挽物をつくり、漆にてぬる挽盆などあり。漆多ければ也。京都へ出し、諸国にふる。」との記事がみえる。

『日本鹿子』

多年の旅行経験をもつ磯貝舟也が著し、元禄4年(1689)に刊行された地誌で15巻12冊から成る。その中の巻七の近江名物の条に「朽木塗物 盆・鉢・五器」の記事がみえる。

『雲州名物』

松江藩主 松平出雲守治郷(不昧公)の名物茶道具類所蔵品台帳で、名称、種類、伝



▲菊盆とも呼ばれる朽木盆。菊のほかには草木・鳥蝶・山水などを描いた

(朽木村史編さん室)

来、買上年、取扱商人 購入価格などを載せる。宝物之部に「鐘の鞆、朽木盆、石川宗豊・井筒屋十左衛門久嘉・三井、寛政年間(1789-1800)、京都加賀屋作左衛門、千六百五十両・位金(相場の見)一千五百両」との記事がみえる。

この他にも朽木塗物のことを載せた江戸時代の文献は数多く存在していますが、これらからわかることは、17世紀すなわち江戸時代前期の刊行物に記されたものが圧倒的に多いということ、朽木塗物が江戸や大坂のみならず全国的なブランドを確立した時期であり、同時に大名から庶民階層にまで愛用されていたことを立証するものと見えます。



豪華絢爛。高島の錦秋絵巻。(朽木小入谷で)

編集後記

▼朝方、道路脇の温度計にひと桁の表示の目が見られるようになり、山々の木々が一気に色づき始めました。良い紅葉になる条件は、台風の影響がなく、夏の日照が十分で、紅葉直前によく冷え込むことだそうです。今年は10月末現在で台風の上陸がゼロ。鮮やかに色づき、深まりゆく錦秋絵巻が楽しみです。▼「きれいな道をみんなの手で!!」今月の表紙は、11月9日に行われた「藤樹の里あどがわ花いっぱい運動」一斉作業の様子をご紹介します。この日は、49の事業所や団体、市民ボランティアなど約2500人が、来春、一面に菜の花を咲かせるための作業を行いました。「ミのボイ捨て防止と藤樹先生のふるさとをアピールしよう」と、バイパスの本線建設予定地1万平方メートルに花苗の植え付けなどの取り組みが始められて8年。これまでの活動が評価され、今年、「高島市未来に誇れるまちづくり活動実践大賞子ども大賞」を受賞されました。「継続は力なり」で、その力の結晶が開き、私たちの心を和ませてくれているのです。(広報担当O)